

皆の広場

素人の歴史考④「播磨の陰陽道（芦屋道満）」 自文科 永野 徹
（陰陽師）「京都の安倍晴明」vs「播磨の芦屋道満」

【1】はじめに

H22.1.23

1. 陰陽道とは

「陰陽道とは何か」と言っても、本来呪術的な修練によって取得されるものなので言葉では表わせないもので、最も基本となる思想は「太極（混沌）が宇宙の絶対唯一の真実である」と言う。万人に取っての真実は「唯一の原理」ではなくて夫々の生き方に応じた混沌（太極）しかないと言う。混沌が真実であるとは如何にも東洋的である。西洋では秩序が基本であり、全く正反対なので大変な違いである。混沌とした太極に「陰と陽」が作用して万物の幹となる五行（ごぎょう）＝（木火土金水）が生れ、夫々兄（え）と弟（と）に分れる。次に幹から枝が伸びて十干となり、更にその枝が分かれて十二支となる。いわゆる「十干十二支」で構成される。

十干＝甲（きのえ）、乙（きのと）、丙（ひのえ）、丁（ひのと）、戊（つちのえ）、己（つちのと）、庚（かのえ）、辛（かのと）、壬（みずのえ）、癸（みずのと）

十二支＝子丑寅卯辰巳午羊申酉戌亥

陰陽道は天体の動きが人間生活と深い係りがあるとする民間宗教と道教が合体して中国で生れた吉凶占いであり、日本で本格的に興隆したのは平安時代である。平安京は陰陽道の「風水の思想」により造営され、山の高さや川の流れる方向等を加味して都造りがなされたと言う。陰陽道には道教の根底となる「気の充実」が重要な役割を占めている。即ち人体の気の流れは気が充実した自然界に身をおくことで「体内の気を元に戻す」ことができる。即ち「元氣」になると説く。

日本でこのような気の充実したところは例えば奈良県吉野郡天川村が上げられるが、播磨では瑠璃寺がある作用郡南光町の船越山がある。

2. 日本陰陽道の起源

以下に述べるように都の陰陽道は葛城山麓の役小角に始まり、平安時代の京都陰陽師である安倍晴明へとつながる。一方播磨陰陽道は法道仙人から始まり福崎七種山から加西市法華山を経て芦屋道満の生れたと言う高砂市竜山へとつながる播磨陰陽道ベルトラインが中心である。

3. 役小角

日本の陰陽道の原点は日本独自の山岳信仰の元祖と呼ばれる役小角にあると言われる。役小角は修験道の開祖で大和の国・葛城山を中心に修行していたが朝廷に逆らったと見なされて699年伊豆に流されたが、そこでも夜になると空を飛んで富士山で修行を積み、朝には海上を走って伊豆まで帰ってきたと伝えられている。日本霊行異記では大和国葛木上郡茅原村に今高賀茂の朝臣として生れたとある現在高鴨神社のある地区の賀茂一族で、その後は京都の上賀茂、下賀茂に進出したことで知られている。役小角は呪術を身につけ、鬼神を使いこなす陰陽術を身につけていたので正に日本陰陽道の祖である。葛城山出身の役小角の陰陽道が賀茂氏によって継承されて、平安中期に陰陽道の大成者である賀茂忠行を産んだと言える。賀茂忠行の子の保憲（やすのり）は天文道と暦道を極めていたが、その子・光栄（みつよし）は暦道だけを継ぎ、天文道は安倍晴明に承継された。

【2】平安時代の最盛期の陰陽道

(1) 陰陽道の2大勢力（京都と播磨）

平安時代には京都藤原派の陰陽師と反京都の播磨陰陽師の2大勢力があった。都の陰陽師は奈良葛城の役小角に始まり京都の賀茂忠行と嫡男の保憲（やすのり）と弟子安倍晴明へと続く。特に安倍晴明は陰陽道の第一人者で安倍神社がある播磨の陰陽師は今昔物語によれば慈岡川人（しげおかかわひと）、弓削是雄、智徳法師の三人と高麗僧恵便とインド僧法道上人の影響下で芦屋道満へと繋がる。

(2) 安倍晴明と芦屋道満

平安時代の2大陰陽師として「安倍晴明（あべのせいめい）」と「芦屋道満（あしやどうま）」がいた。時代を遡ると彼等は天文学者、哲学者、医師、神官を1人で兼ねて精神界と物質界を牛耳る超能力者であった。

平安中期、藤原道長の専属陰陽師であった「安倍晴明」により藤原顕光の専属陰陽師であった「芦屋道満」は「道長を呪う仕掛けの疑い」で嵌められて播磨へ流罪となった。道満塚が播磨の作用町下江川にあり、ここに住みついたと言われるが、谷1つ隔てた高台には安倍晴明の晴明塚があると言うのも奇妙である。

(3) 古典に見る安倍晴明と芦屋道満の跡

事件1. 「宇治拾遺物語」によると;
「この世をば我が世と思う望月の欠けたることはなし」と榮華を誇った道長が病気をきっかけに法成寺を建て毎朝参拝していた。ある朝山門を潜ろうとした所、白い飼犬が盛んに吠え立てたので安倍晴明に調べさせた所、山門下の土中に2枚のカワラケが埋められていて、その間からこよりひもで十文字に編んだ呪い文が見つかり、これで紙飛行機を作り飛ばしたところ、芦屋道満の住む六条万里小路へ届いたので道満等は捕えられ顕光は死罪となり道満は情状酌量で播磨に流罪となった」と言う。

事件2. 安倍晴明が遣唐使となって中国に留学している間に道満は晴明の妻梨花と通じて、秘蔵の書「金烏玉兔(きんうきよくと)集」を盗み取り帰国した晴明の首を切る。その様子を陰陽術で透視した晴明の中国・唐の師匠である伯道上人が来日して晴明の骨を拾い集めて続命術により生き返らせて道満の首をはねたという話がある。また他にも古浄瑠璃「信田妻」とか歌舞伎の「芦屋道満大内鑑」として二人の対立構図が描かれていることは有名である。

事件3. 信田妻と芦屋道満大内鑑
陰陽道の大御所賀茂保憲(やすのり:忠行の子息)の養女榊の前は父の高弟である芦屋道満か安部保名(晴明の父)のどちらかに譲るべき家伝の秘書を盗まれ責任を感じて自殺する。榊に恋していた保名は悲嘆の余り発狂して彷徨うが榊にそっくりの妹・葛の葉に出会い正気に戻り将来を誓う。その後保名は白狐を救うことが有りその白狐が葛の葉に化けている事を知らずに結婚し、男の子を生んだ。ところがある日・本物の葛の葉が保名を訪ねてきたので白狐は男の子に名残を惜しみながら古巣の森へ帰って行くという話で、白狐の産んだ男の子が安倍晴明であったと言う。晴明の術がとても人間業ではないと強調したかったのであろう。

【3】播磨の陰陽道の流れ

(1) 播磨陰陽道の成長

はりまの陰陽道は高麗僧「恵便」、インド僧法道上人に続く遣唐使「吉備真備」によって中国正統陰陽道の学問的裏づけを得ることにより一段と進歩して、平安時代の芦屋道満で最盛期を迎えた。

1) 播磨鑑

播磨鑑には七種山作門寺の慈岡川人の記載がある。

1. 慈岡川人 七種滝で高麗国から来た僧恵灌が聖徳太子の命を受け修行していた所、川人が現れて「大悲の像を造って欲しい」と頼み十一面観音を彫り、本尊として慈岡寺を築いた。その後ここを訪れた行基が自ら地藏像を刻んで安置し七種山は霊山であると告げたので天皇の信仰も厚く仏閣が整い作門寺となったとされている。これが現在の金剛城寺である。

恵灌は中国陰陽道の影響を受けた高句麗の出身であり、七種山で独学の陰陽術を習得していた慈岡川人にとって本格的な陰陽道の師を得たことになる。更に作門寺伝承には法道仙人がここに来て住んだことがあると伝える。

2. 法道仙人 法道仙人はインドの人で中国、朝鮮を経て7世紀頃に日本へ来たとされている空を飛ぶ術を心得ていて日本に来て八葉の蓮華に囲まれた山地形の加西市法華山一乗寺に降り立った仙人と言われており、托鉢の鉢を播磨灘まで飛ばして海上の船から米を布施させた話でも有名な仙人である。
法道の飛鉢伝承で瀬戸内海の海上の船まで鉢を飛ばして米の喜捨を求めたのは法華山であり船まで飛ばす中継所が竜山であった。竜山周辺に鉢を置いたと謂れの鉢塚とか飛鉢塚が伝えられている。船主の反省に応じて米俵を一俵だけ船に返した時に米が落ちた所を「米墮」と言いのに「米田」に転じたと言う。室町時代になると法道仙人は播磨の陰陽道の始祖で芦屋道満がその後継者

であると呼ばれるようになったと記載している。
福崎町七種山から加西市法華山を経て高砂竜山へつながる播磨陰陽道ベルトラインこそ古代から中世にかけて播磨の陰陽道の中心地帯であった。

3. 吉備真備

吉備真備は天平7年(735)22歳で遣唐使留学をし、20年後に帰国した時に姫路の広峰山を見て、中国の牛頭山を連想してそこに祇園神である牛頭天王を祭った。これが京都へ分身されて八坂神社の祭神となった。
因みに牛頭天王は薬師如来と同体と見なされ健康を司る神とされている。
吉備真備は中国から多くの学問を導入した、その中で陰陽道に係る分野では暦を学び風水の思想に通じる所があったようです。
播磨には京の陰陽師を警戒させる陰陽師集団があったことを今昔物語は教えてくれる。

4. 慈岡川人

慈岡(しげおか)は神崎郡福崎町の七種滝(なぐさのたき)に住む播磨の伝説上の人物です。ある年ひでりが続いて穀物が実らず、秋の終わり頃に住民の一人が滝の近くまで入り込むと下流の干ばつにも拘わらず滝に水が流れており、更に上って行くと一番奥の滝壺に1人の仙人が住んでいた。その仙人が慈岡川人だったと言う。慈岡仙人は村人から穀物の種がない事を聞き、「米、麦、粟、キビ、ヒエ、大豆、小豆の七種類の種を与えたので村人は翌年これを播いて飢饉から救われたことから、七種類の「種」に因んでこの山を七種山、滝を七種滝と名付けた。
今昔物語の慈岡川人は陰陽道の頭で陰陽博士従五位下と言う高貴な人物で登場する。時代は858年、文徳天皇が亡くなられ天皇の御陵地を選定して帰り道に同行した大納言に「地神に追いかけているので、馬を空で帰して二人はここで藁に隠れていようと陰身の呪文をとなえて待っていると何万人もの追っ手が通り過ぎて、何人かが引き返し「馬の足跡からするとこの辺りにに潜んでいる」と探したが見つけれず、地神達は大晦日には必ず捕えて見せようと捨て台詞をして引き揚げた。大晦日に川人らは嵯峨寺の天井に潜んでいると地神が探しに来たが川人の陰陽術に負けて見つけ出す事ができずに引き揚げた言うことで魔物の地神を追放した慈岡川人は一躍有名な陰陽師として尊敬されたと言う。

5. 弓削是雄

弓削是雄は播磨の国・飾磨郡の出身で当時右京三条三坊に住んでいて「天文博士夢占語(ユメウラナウコ)」と紹介されている。
近江の国、勢多駅で是雄が宿した時に東国帰りの国司と同宿となり、翌日朝国司が昨夜の夢を占って欲しいと言うので、暫く自宅に帰らないかどうしても帰りた時は「弓に矢をつがえて自宅の東北隅に狙いを定めて「わしを殺そうとしているのはお見通しだ。早く出て来い。さもなければ射殺すぞ」と進言しその通り実行した所、東北隅の菰の中から法師が現れ殺意を認めたことで是雄の夢占いは評判となったとのこと。

6. 智徳法師

智徳法師は播磨の国明石在住の陰陽師で、ある時、明石浦で西国の船が海賊に襲われ船ごと奪われてしまったので岸に逃げ戻った船員が智徳に助けを求めた。智徳は船主と小船で漕ぎ出して、船上で呪文を唱えたところ漂流船が現れ海賊たちは酔っ払い眠りこけていたので難なく捕まえて荷を取り戻すことができたと言う。この時、智徳は安倍晴明により識神(陰陽師の手足となる神)を奪われていたにもかかわらずと言うから、その陰陽術は凄いものである。

7. 芦屋道満

播磨鑑によると、道満は「印南郡岸村の産なり」とあり現在の加古川市神吉町岸に道満屋敷があったと言う。更に高砂市阿弥陀には道満井戸があったと伝えられる。また室町時代に姫路市三宅村には道満の子孫道仙が住み着き、飾磨区構には薬野があり薬草園を作り、道行く人に薬を施し「三宅施薬」と呼ばれたとある。この伝えからすると道満は播磨に流されたのか？生れ故郷に帰されたのか？どちらにしろ、播磨陰陽道の福崎ー加西ー高砂ベルトラインに強い影響を与えた。

